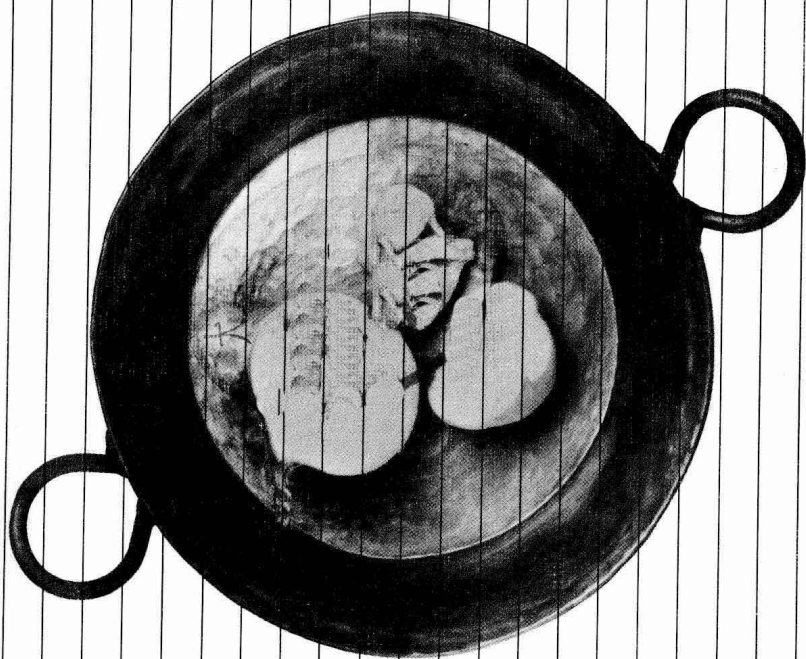


書斎のポト・フ

開高 健/谷沢永一/向井 敏



開高 健/谷沢永一/向井 敏



潮出版社

著者略歴

開高 健 (かいこう・たけし)

昭和5年大阪生まれ。元「えんぴつ」同人。

主著『夏の闇』(新潮社)『最後の晩餐』(文藝春秋)『オーバ!』(集英社)

谷沢永一 (たにざわ・えいいち)

昭和4年大阪生まれ。元「えんぴつ」同人。

主著『完本紙つぶて』(文藝春秋)『読書人の立場』(桜楓社)『古典の読み方』(祥伝社)

向井 敏 (むかい・さとし)

昭和5年大阪生まれ。元「えんぴつ」同人。

主著『紋章だけの王国』(日本実業出版社)『にぎやかな遊歩道』(創拓社)『読書巷談・縦横無尽』(谷沢永一と共著・日本経済新聞社)

書齋のボ・ト・フ

昭和56年9月25日 初 版

昭和56年11月30日 2 刷

著 者 開 高 健
谷 沢 永 一
向 井 敏
発行者 富 岡 勇 吉

〒 102 東京都千代田区飯田橋3の1の3

発行所 株式会社 潮 出 版 社

電話(230)0781 (編集) 振替東京5-61090
(230)0741 (営業)

印刷・大日本印刷

製本・東京美術紙工

落丁・乱丁本はお取替えいたします。販売窓口あて御郵送下さい。本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めて下さい。

©Kaiko, Tanizawa, Mukai 1981, Printed in Japan

書齋のボ・ト・フ*目次

八丁堀のホームズ*捕物帳耽読控 9

岡っ引の品定め 半七と右門と平次の関係 江戸情緒の韻をふむ定型文学 構成上の祖型をつくった『右門捕物帳』 戦後捕物帳の新趣向 都筑道夫のダンディズム パロディの逸品「暇なき読書子に寄す」 文学賞二態——早川書房型と中央公論社型 「捕物帳」と「犯科帳」 山本周五郎こそ日本のハードボイルド

付記

向井 敏

虹をつかむ男たち*ロマン・ピカレスク頌 43

泥棒貴族エドワード・ピアース ジャングルの掟 ヴィクトリア朝史外伝 悪漢小説史早わかり 詐欺師の条件 「憎しみも暴力も武器もなく！」 ピカレスク映画の名作 永遠なるイワンたち ユーモアのスパイス

付記

谷沢 永一

末はオセロかイヤゴーか*児童文学序説 77

大人をだますよりむずかしい子どもの小説 リライトの害について 凜平たる名訳「西遊記」 キレイごとでかためた冒険小説 子どもに媚びるいやらしさ 「少年倶楽部」を黙殺する非常識 ベストセラ「課題図書」の課題 冷酷非情というスパイス 子どもは大人

の世界をのぞき見たがる

付記

海外児童文学傑作選

荒野のパンテオン＊現代マスコミ論

109

テレビの主役は司会者 国定教科書としてのニューズ解説 テレビ
に出る偉い人 七百万部の恥辱 新聞漫画の愚劣 セレの痛烈 キ
ノの哄笑 サールの残酷

付記

開高 健

手袋の裏もまた手袋＊文学のなかの政治人間

135

神々は悪役に泣く 「絶対」にとりつかれた人間の愚行 低級な正義感と凡庸な平等感が支配する革命裁判 政治における黒幕の位置 勤勉なフーシエを操った怠け者タレイラン ボルジアに魅せられた マキアヴェリ 「名はかんばしき諸葛亮」への傾斜 イタリア人が ウソをつかなくなったらこの世はおしまい

付記

向井 敏

山川草木鳥獣虫魚＊ナチュラリスト文学考

175

サケの教養小説 知的活動と本能的動作 擬人化論争 すれっから
しの男にあこがれを きだみのる頌 進化論への不信 若書き 中
書き 老い書き

付記

開高 健

野に遺賢 市に大隠*知られざる傑作

201

全巻ヤマ場、篠沢話法の秘密 会話の政治学 クイズ番組の名傍役
セクシヨナリズムへの反撥 『エルナニ』以来の事件 スペイン語
は神様と話をする言葉 スペイン風恋の手話 ほんもののナンセン
ス文学 天下の奇文「タイジ・トノヤマの法則」 掛け合い漫才の
秀逸「福島のおんな」 都会人のはにかみ 雨の午後の「けだるい
喜び」

付記

谷沢 永一

余談「千夜一夜」

243

写真 装丁
青山紘一 坂根 進

書齋のボ・ト・フ

ポ・ト・フ　ポ・ト・フーとも。フランス料理の一つ。レストランの御馳走というよりはざつくばらんのごった煮の妙味を愉しむ家庭料理。脛骨の髄からとったスープで煮るが、バラ肉、塩豚、鶏などにポロネギ、ニンジン、タマネギ、カブラなど、ありあわせの材料をかたっぱしからほりこんで四時間か五時間ごとにと。むつかしい処方もなく、定式もなく、儀式もなく、季節もまた、ない。この一冊の本の狙いもそのあたりにある。果してダシがよくしみておりますか、どうですか。食後の枕としても、どうぞ。よしなに。

(開高 健)

——探偵小説なんて疲れたときか病気のときの読物にすぎないと言う人たちがいる。そのくせ、かれらの読書量のおびただしさときたらあきれるばかり。察するに、かれらはつねに疲れているか病気で引きこもっているのにちがいない。

レイモンド・チャンドラー『単純な殺人芸術』序

——物語を求め、物語を楽しむ。太古以来変らぬこの人間の欲望を満たすがゆえに、探偵小説は多くの欠陥を持つにもかかわらず広く読まれ、この欲望に背を向けるがゆえに、純文学はすぐれた美質を持つにもかかわらずほとんど読まれることがない。

サマセット・モーム『探偵小説の歴史』

八丁堀のホームズ＊捕物帳耽読控

池波正太郎選『捕物小説名作選』

岡本綺堂『半七捕物帳』

佐々木味津三『右門捕物帳』

野村胡堂『銭形平次捕物控』

久生十蘭『顎十郎捕物帖』

都筑道夫『なめくじ長屋捕物さわぎ』

池波正太郎『鬼平犯科帳』

有明夏夫『耳なし源藏召捕記事』

*

都筑道夫『即席世界名作文庫』

岡っ引の品定め

開高 われわれ三人が一堂に会して、いや、堂と言えるほどのものじゃないな、ひとつところに集まって、ゆっくり本の話をするのは何年ぶりだろう。

谷沢 昭和二十七年以来だからおっつけ三十年だな。

向井 もうそんなになるのか。

開高 じつに三十年ぶり。日本も変った、世界も変った、出版界も変った、世の中いろんなものが変っちゃったんだけど、昭和一ケタのこの三人はこうして顔を合わせてみるといつこうに変わらなくて(笑)。

この昭和一ケタというのが、近ごろガンやら何やらでのべつまくなしに死による。毎月、死亡通知が来る。鼻先を弾丸がかすめとるみたいや(笑)。ヴェトナムのジャングルで撃たれたときの、その一歩手前あたりの感じがあるな。それで、今のうちに会って顔を見て話し合うということをやっておかんことには、死ぬまでもうそんな機会がないのじゃないかという気もある。著作家が死んでから、故人をほめたたえるためにつくる本、そして墓前に供える本、これを出版界では俗に饅頭本まんとうほんというのだけれど、生きているうちに三人の饅頭本をつくつところかというんで、この鼎談をはじめのわけであります(笑)。

まず、下からいこう。下からなんて言うて書いている人に怒られそうだけれども、とにかく

世間であまり着目しないものからいこう。そこでまず、明治以来の近代化のなかで生まれた日本独自の文学ジャンルである捕物帳をとりあげたい。はじめに、向井敏クン（笑）。

向井 そうだな、どこから手をつけたものかな。なにしろ龐大な量なんだね。岡本綺堂が博文館の「文芸倶楽部」に『半七捕物帳』の連載をはじめたのが大正六年。これが捕物帳の皮切りで、それから今まで捕物帳を書いた作家は百人じゃきかんだろう。戦後までもなくのブームのときには、捕物作家クラブに加わった人が百七十人もいたらしい。それに捕物帳というのは長いシリーズで、野村胡堂の『銭形平次捕物控』にいたっては三百八十六篇。こんなのを総ざらえていたんではいくら時間があっても足りはしない。たまたま、池波正太郎の編集で『捕物小説名作選』（集英社文庫）という手ごろな一冊選集が出たんで、さしあたってこれをとっかかりに岡っ引の品定めをしようと思うんだが。

開高 十二篇選び出しているのね。選び方についてはどうや。

向井 いちおう目次を並べてみよう。戦前のものでは、岡本綺堂の『半七捕物帳』、佐々木味津三の『右門捕物帳』、野村胡堂の『銭形平次捕物控』、城昌幸の『若さま侍捕物手帳』、久生十蘭の『顎十郎捕物帖』、戦後のものでは、坂口安吾の『明治開化安吾捕物帳』、村上元三の『加田三七捕物そば屋』、柴田錬三郎の『貧乏同心御用帳』、南条範夫の『岡っ引源蔵捕物帳』、伊藤桂一の『風車の浜吉捕物綴』、藤沢周平の『神谷玄次郎捕物控』、有明夏夫の『耳なし源蔵召捕記事』。合わせて十二のシリーズから一篇ずつ選んでいる。一冊もののアンソロジーとしては、戦争中に兵隊の慰問用に捕物帳傑作集というのが編集されたことがあるらしいんだが、

戦後ではたぶんこれをはじめでしよう。歴史的展望も兼ねていてなかなか重宝で、選択には相当苦勞したろうけれども、こっちの都合から言えば、あれこれ文句をつけたいところがあるんだな。

都筑道夫の『なめくじ長屋捕物さわぎ』（全四冊。桃源社・昭49↗昭51）と池波正太郎自身の『鬼平犯科帳』（『新鬼平犯科帳』を含め、全十五冊。文藝春秋・昭和43↗昭55。のち、一部文春文庫）、この二つをはぶいてあるのがまず解せない。あとで話題にするつもりだけれど、この二つのシリーズは捕物帳の系列のなかでははずせないもので、これがいっていったらこのアンソロジーはもっと光ったろうと思う。

谷沢 もうひとつの疑問は、岡本綺堂の『半七捕物帳』（全六冊。旺文社文庫）から「お文の魂」を選んだこと。綺堂にはいわゆる奇談もののシリーズがあつて、その奇談ものの流れのうえであつたと目先を変えて書いてみたのが「お文の魂」でしょ。これは江戸生き残りの老人からの聞き書きという形でまとめた話で、半七もほんのちらつと顔を出すだけなのよ。綺堂はそのあと、二作目の「石燈籠」、三作目の「勘平の死」と書き継いでいって、手さぐりで捕物帳のスタイルをつくり出していった呼吸がうかがわれるんだけど、この「お文の魂」では『半七捕物帳』の存在理由は全然わからない。どうしてこれを選んだのかというのが、この選集に對するぼくの疑問なわけ。

向井 久生十蘭の『顎十郎捕物帖』（三一書房『久生十蘭全集』第四巻）でも同じことが言えるのね。第一作の「捨公方」を入れてあるんだけど、これは將軍家御落胤にからまる伝奇も

ので、博識を駆使した謎ときという類十郎もの独得のおもしろさがまだ出ていない。全体にこの選集はそれぞれの作家のシリーズ第一作にこだわりすぎていて、十二篇のうち半分以上がそうだね。

開高 処女作の初々しさを重んじたわけやね（笑）。

半七と右門と平次の関係

向井 それで、岡本綺堂なんだが、『半七捕物帳』はミステリとしてはあちらものの翻案だということがよく言われるのね。つまり、謎をどう仕掛け、どう解くかという肝腎のところは、シャーロック・ホームズをはじめあちらの探偵小説から借りてきて、シチュエーションだけを江戸時代に置いたんだと。綺堂自身、あちらのミステリを原書で片っぱしから読んでいたそうだし、そういえば、「お文の魂」で子どもが草双紙の挿絵におびえるのを利用して一計を案じるといふのも、ポーカドイルか、どっちかにあったような気がするんだが、このことで先だって有明夏夫が反論していたな（『朝日新聞』昭和55年9月3日夕刊）。それなら日本の近代小説はどうなる、まるごとあちらものの引き写しじゃないか、それより『半七』の換骨奪胎のうまさをはめるべきじゃないかと、こう言うんだ。ともかく、はじめは借り物だったにせよ、謎ときや犯罪捜査を縦軸に、江戸時代というワクのなかで純粋培養された義理や人情や風俗を横軸にして、それもしだいに後者に重点を移していく形で何人もの作家が書き継いでいて、日本独